## 原 著

## サルコイドージスの臨床的研究 第1報 自験 167 例の検討

## 森 川 聡

新潟大学第2内科教室(主任:木下康民教授)

受付 昭和 54 年 7 月 4 日

#### CLINICAL STUDY OF SARCOIDOSIS

#### Part 1

#### Satoshi MORIKAWA\*

(Received for publication July 4, 1979)

Between 1962 and 1979, one hundred and sixty-seven patients with sarcoidosis were seen at our clinic, 59 were male and 108 were female, with ages ranging from 11 to 73 years. The clinical findings in our patients were compared with those of other series from the literatures, mainly of Japanese Sarcoidosis Committee.

- 1. In our series, 71 patients (42.5%) were detected by the mass miniature radiography. In patients detected by symptomatic visit, 52 patients (31.1%) complained ocular symptoms and others complained one or more symptoms such as fatigue, fever, pulmonary signs (cough and/or sputum), and joint pain.
- 2. As it is difficult to diagnose sarcoidosis only by the chest roentgenograms, we performed some kinds of biopsy procedures for diagnosing sarcoidosis. A total of 232 tissue specimens had been obtained from 158 patients, and epitheloid cell granulomas were found in 61.8% of specimens.

When ocular involvements were the only demonstrable abnormality of the disease or no hilar adenopathy was seen, a mediastinoscopic biopsy should be done, and this will be useful in making the differential diagnosis of the sarcoidosis.

3. Serum angiotensin I converting enzyme (ACE) level was found to be significantly elevated in patients with active sarcoidosis ( $46.5\pm13.1$  unit), compared to that of patients with inactive sarcoidosis ( $20.0\pm7.1$  unit) and normal control subjects ( $20.9\pm7.1$  unit).

In 14 patients with bilateral hilar adenopathy, initial serum ACE activity was  $40.1 \pm 12.9$  unit and it dropped down to  $26.5 \pm 10.5$  unit after the disappearance of hilar adenopathy, and the difference was highly significant.

4. A number of factors were found to be useful in predicting the prognosis of sarcoidosis. Generally speaking, the resolution of nearly all types of sarcoidosis lesions are expected within two years after the diagnosis was made. The factors which relate to good prognosis were the male patients diagnosed by the mass miniature radiography, the age below 28 and the absence of ocular involvements. The prognosis of the patients with acute onset were very good.

<sup>\*</sup>From the Second Department of Internal Medicine, Niigata University School of Medicine, Asahi-Machi, Niigata 951 Japan.

## はじめに

サルコイドージス (サ症と略) は、1960年の国際会議 で病因および発症機転不明の全身性肉芽腫形成疾患と定 義された。 しかし、その歴史は古く、1869年 Hutchinson<sup>1)</sup>により皮膚病変として報告されたのが第1例で、 1914年 Schaumann<sup>2)</sup> が初めて全身系統的疾患としての 本症に注目した。本邦では1921年竹谷30による皮膚病変 の記載が最初であるが、1954年ごろから、特に呼吸器疾 **患としてのサ症が注目されるに至つている。わが国のサ** 症研究活動としては、1960年にサ症臨時疫学調査班によ る第1回の実態調査が行なわれ、1965年にサ症研究協議 会 (サ研協と略) が発足し、以来、サ研協が母体となつ て協同研究が行なわれている。

当教室では1962年に第1例を経験して以来,1978年12 月末日現在までの17年間に167例を経験している。自験 例では個々の症例について綿密な検索を進めてきている が、アンケート調査によるサ研協による本邦の実態調査 ではとらえられない数多くの興味深い知見も得ているの で、対比可能な点については全国例と比較を行ないなが ら報告する。

#### 寸 象

対象は1962年から1978年までの17年間の第2内科外来 および入院患者 167 例で、組織診断 137 例、臨床診断30 例である。検査に遺漏ないよう表1のような計画表を作 り、各項目について検討した。

#### 成 績

## I. 白験症例の実態

(1) 年次別発見患者数の推移(図 1)

167 例の大多数は新潟県内の在住者であるが、一部の 患者は山形,富山,石川,福島の各県からの紹介が含ま れる。1962年から1971年ごろまでは患者数は漸増傾向に あり、1970年までの前期9年間と1971年以降の8年間を 比較してみると、前期では年平均の患者数6.1人に対し、

## 表 1 サルコイドージス調査項目

## 1. 入院時一般検査

- a) 検血では mono, lymph の絶対数
- b) 蓄尿, 少なくとも 3 日間, Ca, P 排泄量測定
- 2. 家 族 歴 同胞,親類,配偶者,同居者,同じ環境内にいないか
- 3. 住居地環境 田舎,都会,自宅,寮
- 4. 初診時採血 血清 1 cc に分注し2 本保存
- NBT テスト (血清蛋白分画,検血は同日) リンパ球培養
- 6. RA. CRP. ASLO. Paul-Bunnell, Au, Coomb's test, ANF, HLA 肝, 腎機能, 免疫グロブリン Ig, G. A. M. E.,  $\beta_{IC/IA}$ ,  $\beta_{IE}$ ,  $CH_{50}$ , 血液型, 尿酸
- (BCG 陽転の時期,接種の有無) ツ反減弱があるか 7. ツ 反 応
- 1回 週 → 1回 月 …… 2回 年 8胸部レ線 発見時, ステロイド治療時には毎週撮影のこと
- カルチュール  $1 \,\mathrm{m} l = 7.96 \,\mathrm{mg} \,\mathrm{d} l$  の  $\mathrm{Ca}$  含有 9. Ca 負荷テスト 4 mg Kg を徐々に静注,30 cc 以上の場合は気分不快を訴えることが多いので注意。35 cc が限度
- 0.2 cc 前膊皮内,油性ペンで○印をつけ,消えた場合に再びマークす 10. Kveim 反応 る。4週間後に判定。退院前に判定日生検可能なようにしておく。
- 11. MIF (Kveim 反応の試験管内診断法)
- 12. リンパ球サブポピレーション T細胞, B細胞
- (受診間隔は眼科の指示に従う) 13. 眼科復券
- 14. 整形外科復券 骨関節病変の検査

- (症例を選択して行ないたいので相談して下さい) 17. 縱隔鏡検査 施行する場合はリンパ節をできるだけとつてもらう。 目的 1)診断 2)病因究明 → a) TB 菌, b) 真菌, c) 一般菌, d) Yersinia 菌, e) Kveim 液の材料
- 18.\* 脳波, 聴力検査, 前庭機能検査
- 19.\* リンホグラフィー
- 20.\* シンチスキャン

<sup>\*</sup> 必ずしも必要でない。

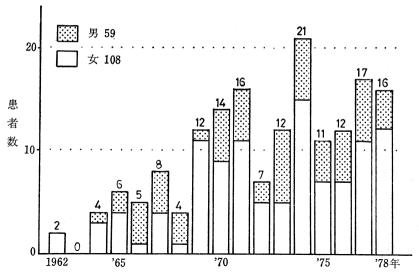


図1 年次別発見患者数の推移

後期では1972年の7例を除いては1974年の21例をピークに年間10例以上を経験しており、年平均14.0人となつている。しかし、近年では特に患者数の増加傾向はみられない。

## (2) 年齢·性別患者数(図 2)

患者の年齢は11歳から73歳にわたり、年齢分布は20歳代が66例と全症例の約40%を占め、次いで50歳代、10歳代、40歳代が多く、60歳以上はわずか10例(6%)である。男女別では男性59例に対し、女性108例で、男女比は1:1.8と女性が約2倍多い。しかし男性では過半数以上が20歳代に集中しているのに対し、女性では20歳代が最も多いが、50歳代まで平均的に各年齢層に分布しており、ただ50歳代に23例ともう1つのピークがみられた。

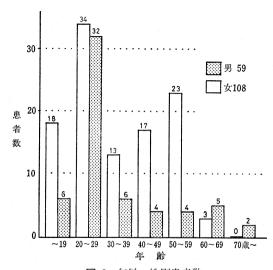


図 2 年齢・性別患者数

表 2 発 見 動 機

	<b>我</b> 2 先 元	90 105	
 1.	自覚症状なし		77 (46.1%)
	検診発見		71 (42.5%)
	偶 然		6 (3.6%)
2.	自覚症状あり		90 (53.9%)
	眼症状で受診		52 (31.1%)
	全身症状で受診		38 (22.8%)
	全身倦怠感	13	
	発 熱	12	
	咳・痰	10	
	関 節 痛	6	
	神経症状	4	
	体重減少	3	
	皮疹	3	
	呼吸困難・胸痛	2	
	表在リンパ節腫脹	2	
	A-V ブロック	1	

167 (100%)

表 3 年次別発見動機

		1962~'66	'67~'70	'71~'74	'75~'78
検	診	8 (47.1%)	18 (47. 4%)	27 (48. 2%)	21 (37. 5%)
眼 症	状	0	9 (23. 7%)	20 (35. 7%)	23 (41.1%)
全身症	状	9 (52, 9%)	9 (23. 7%)	8 (14. 3%)	11 (19.6%)
その	他	0	2	1	3
総	数	17	38	56	56
		1			I

			~19歳	20~29	30~39	40~49	50~59	60歳~			
検		診	17 (70. 8%)	35 (53.0%)	(21.1%)	7 (33. 3%)	9 (33. 3%)	0			
跟	症	状	(16. 7%)	14 (21. 2%)	8 (42.1%)	(38.1%)	9 (33.3%)	(90.0%)			
全	身 症	状	(12.5%)	16 (24. 2%)	(26. 3%)	6 (28.6%)	7 (25. 9%)	0			
そ	の	他	0	, , 1	2	0	2	1			
総		数	24	66	19	21	27	10			

表 4 年齡 別 発 見 動 機

## (3) 発見動機(表 2)

本症の発見動機は表2に示すように、「自覚症状なし」 が77例(46.1%)、何らかの自覚症状を伴い受診したもの が90例 (53.9%) であつた。「自覚症状なし」では検診発 見が71例と最も多く、全症例の42.5%を占めているが、 他の疾患で治療中に偶然、撮影した胸部X線写真で異常 を発見されたものが6例(3.6%)にみられた。「自覚症状 あり1の90例の中では、眼前霧視、複視、視力障害など の眼症状で受診したものが52例(57.8%)と最も多く、総 数でも31.1%を占めている。次いで全身倦怠感,易疲労 感, 体重減少, 発熱などの全身症状や, 咳, 痰, 呼吸困 難などの呼吸器症状の頻度が多く, そのほかには顔面神 経麻痺, 目まい, 頭痛などの神経症状が発見の端緒とな つたものが4例、皮疹、皮膚紅斑などの皮膚病変3例, 表在リンパ節の腫脹2例,完全房室ブロック1例などで あり、この他、関節痛の6例が注目された。発熱や関節 痛、皮疹などを伴つて発症したいわゆる急性発症例は9 例みられた。

発見動機を年次別にみてみると(表 3), 1962~1966年の初期においては全身症状で発見されたものが過半数であり、眼症状で受診した者は1例もみられないが、年とともに眼症状による受診者の割合が多くなつている。最近の5年間では、検診発見例は約10%減じ、その代り自覚症状をもつた発見が増加している。一方、年齢別に発見動機を比較すると(表 4), 10歳代、20歳代では検診による無自覚症発見例がそれぞれ70.8%、53.0%と多く、30歳以上になると自覚症状発見例が増加している。30歳代の眼症状発見例は42.1%と高率であり、60歳以上の症例では検診発見は1例もなく、全例が自覚症状を伴つて発見された。

#### II. 臨床像

## (1) 初診時の胸部X線像所見(表 5)

初診時の胸部X線像所見を,1)異常なし,2)肺門型,3)肺門+肺野型,4)肺野型の4型に分類した。肺門型の異常所見には両側肺門リンパ節腫脹(BHLと略)の場合と,一側性肺門リンパ節腫脹(UHLと略)があるが,両者を一括しBHLと分類した。結果は表5のように,

表 5 初診時の胸部 X線像所見

	M	B		01
	異常なし	肺門型	肺門+肺野型	肺野型
総数	20 (12.0%)	117 (70.1%)	21 (12.6%)	9 (5.4%)
167		(82	.6%)	
50歳> 130	13 (10.0%)	100 (76.9%)	15 (11.5%)	2 (1.5%)
		(88)	5%)	
50歳≦ 37	7 (18.9%)	17 (45.9%) (62.	6 (16.2%)	7 (18.9%)
全国集計 1,752	92 (5.3%)	1,098 (62.7%)	520 (29.7%)	42 (24%)

異常なし20例(12.0%), BHL(UHL 4 例を含む)のみ117例(70.1%), BHL+肺野型21例(12.6%), 肺野型(肺線維症3 例を含む)9例(5.4%)であり、総数の82.6%にBHLがみられたが、肺門肺野に全く異常陰影を認めない症例も前記のごとく少なからずみられた。年齢を50歳未満の130例と50歳以上の37例に分けて X 線像所見を比較すると、50歳未満では115例(88.5%)が BHLを有しているのに対し、50歳以上の群では BHLを示す頻度は37例中23例(62.2%)と低下し、一方「異常なし型」および「肺野型」がおのおの7例(18.9%)と多くなり、50歳以上の群では非定型サ症の頻度の増加傾向がみられた。

#### (2) 臨床検査成績(表 6)

初診時、または発見時に最も近い時点で行なつた主な検査成績を項目別に調査した(表 6)。

①赤沈値: 性別と無関係に 1 時間値 14 mm 以下を正常, 15~49 mm を中等度亢進, 50 mm 以上を高度亢進とすると,正常100例(62.9%),中等度亢進49例(30.8%)であつたが,高度亢進例が10例(6.3%)にみられた。

②白血球数, リンパ球数: 白血球数は101例(61.6%)

			20 HIII //	大 氏 丘 从 順					
赤  沈	14 mm> 15~49 50< ASLO		ASLO	100≧	≧ 1	25~165	250~333	625≦	
(mm/hr) 159	100 (62. 9%)	(30. 8%)	10 (6.3%)	125	99 (79. 2	2)	23 (18. 4)	(1.6)	(0.8)
白血球数	~4,900	5,000~8,90	9,000~	СНА	×64	×128	3 ×250	6 ×512	×1,024≦
164	54 (32. 9%)	101 (61.6%)	9 (5. 5%)	94	43 (45. 7)	21 (22. 3	) 16 (17. 0	11 (11.7)	3 (3. 2)
リンパ球数	$999 > \begin{vmatrix} 1,000 \sim \\ 1,499 \end{vmatrix} \begin{vmatrix} 1,500 \sim \\ 1,999 \end{vmatrix} \begin{vmatrix} 2,000 \sim \\ 2,499 \end{vmatrix} \begin{vmatrix} 2,500 \sim \\ 2,499 \end{vmatrix}$		$2,000 \sim 2,499$ 2,500 $\sim$	P. Bunnell	× 56	3	×112	×224	×448
162	37 55 (22. 8) (34.		25 (15. 4) 11 (6. 8)	77	34 (44. 2	!)	28 (33. 4)	13 (16. 9)	(2.6)
γ-グロブリン	~1.00 1.0	1~1.49 1.50~	~1.99 2.00~	ツー反	(-	)	(±	)	(+)
(g/dl) 152	20 (13. 2)	86 56. 6) 3 (24		155	79 (51. 0		17 (11.		59 (38. 1)
CRP	-~±	1+~2+	3+~	DNCB test	(-	)	(±	)	(+)
153	135 (88. 2)	11 (7. 2)	7 (4.6)	58	27 (46. 6		1	(	30 51.7%)

表 6 臨床検査成績

が 5,000~8,900 の正常範囲にあるが、4,900以下の減少例を54例(32.9%) に認め、一方 9,000以上の増加例は 9 例(5.5%) と少なかつた。 白血球におけるリンパ球の百分率の比率は低い傾向にあり、実数で  $1,000/\text{mm}^3$  未満の減少例が37例(22.8%)にみられた。

③血清 7-グロブリン値: 152例中 1.0 g/dl 以下の減少が20例 (13.2%)に対し,1.5 g/dl 以上の軽度増加が37例 (24.3%),2.0 g/dl 以上の高度増加が 9 例 (5.9%) にみられた。最高値は 3.4 g/dl で,それ以上の増加例は認めなかつた。

④血清反応: CRP 反応陽性例は18例(11.8%)にみられ、3(+) 以上の強陽性が7例(4.6%) に認められた。 ASLO 値はほとんどが正常範囲であり、625倍以上は1例(0.8%)のみであつた。寒冷凝集反応512倍以上の高値を示すものが14例(14.9%)と比較的少数ではあつたが認められ、Paul-Bunnell 反応の448倍以上は2例(2.6%)にみられた。

⑤ツベルクリン反応, DNCB パッチテスト: 2,000倍の PPD 反応は79例(51.0%) が陰性であり、陽性者は59例(38.1%) にすぎなかつた。DNCB (2-4 dinitrochlorobenzene) による皮膚パッチテストで接触過敏症の成立能力を検討した結果は、陽性者30例(51.7%)で、約半数は感作不成立であつた。

## III. 診 断

#### (1) 生検成績(表 7)

私どもの行なつている生検は、疑わしい皮膚変化がある場合は皮膚生検を、表在リンパ節が触知できる場合にはその部位の生検を行なうが、視診、あるいは触診上病変が明らかでない場合は、症例に応じて前斜角筋リンパ節生検 (SNB)、縦隔鏡下のリンパ節生検 (Med.)、経気

表7 生 検 成 績

	生検数	陽性	陰 性	陽性率
前斜角筋リンパ節	60	42	18	70.0%
縦 隔 鏡	57	53	4	93.0%
経気管支肺生検	46	22	24	47.8%
皮膚	23	19	4	82.6%
肝	17	7	10	41.2%
表在リンパ節	14	11	3	78.6%
開胸肺生検	4	4	0	100%
腎	11	0	11	0%
計	232	158	74	68.1%

管支肺生検 (TBLB), 開胸肺生検を行なつている。また 腎や肝, あるいは胃に病変の存在が疑われる場合には, それぞれ腎生検, 肝生検, 胃生検を行なつている。

このようにして145例に延べ232回各種の生検を行なつたが、全生検における病変発見率は158回、68.1%であり、腎生検を除いた陽性率は71.5%であつた。各臓器生検と、それぞれの陽性率を比較すると表7のごとくである。すなわち縦隔鏡下のリンパ節57例中53例(93.0%)、皮膚23例中19例(82.6%)、表在リンパ節14例中11例(78.6%)、前斜角筋リンパ節60例中42例(70.0%)に高い陽性率が得られた。経気管支肺生検は46例中22例(47.8%)、腹腔鏡下の肝生検は17例中7例(41.2%)の陽性率であつた。開胸肺生検はびまん性の肺陰影を呈し、かつ他の生検方法で診断しえなかつた4例に行ない、全例に類上皮細胞肉芽腫を証明した。一方、腎生検は11例に行なつたが肉芽腫は1例もみられなかつた。

#### (2) Kveim 反応(表 8-a, b)

Kveim 反応は従来から本症に特異的と考えられてい

表 8-a Kveim 反応

		サルコイドージス	対	照
(	(+)	46		0
Kveim	(-)	75		19
	%	38.0		0

表 8-b Kveim 反応

		眼病変		PF	ď	DNCB テスト	
		(+)	(-)	(+)	(-)	(+)	(-)
Kyeim	(+)	31		17	30	7	8
反応 {	(-)	46	24	- 30	44	21	15
	%	40.3	33.3	36. 2	40.5	25.0	34.8

る。教室でもサ研協から供与された Kveim 抗原をサ症 患者121例に接種し、46例(38.0%)の陽性率を得た。対 照として塵肺症、肺結核症、ぶどう膜炎、結節性紅斑な ど19例に行なつた結果は全例陰性であつた。したがつて 陽性と判定された場合にはサ症の確診は高い(表 8-a)。 陽性率を眼病変の有無、ツ反、DNCBテストの成績と 比較(表 8-b)してみると、「眼病変あり」群の陽性は 77例中31例(40.3%)、「眼病変なし」群では36例中12例 (33.3%)で、「眼病変あり」群で陽性率の高い傾向がみ られた。ツ反陽性群の Kveim 反応陽性率は36.2%、陰 性群のそれは40.5%であり、DNCBテスト陽性群では 25%に対し、陰性群では34.8%の陽性率であつた。また ツ反と DNCBテストの両皮膚反応が陽性で、かつ Kveim 反応の陽性例はわずか12例中1例(8.3%)であつ た。

#### (3) 胸部 X線所見と生検陽性率(表 9)

胸部 X線像の所見と前斜角筋リンパ節生検 (SNB),縦隔鏡下のリンパ節生検 (Med.),および経気管支肺生検

(TBLB) の陽性率を比較した(表 9)。Med. は BHL の ない正常例や肺野型でもそれぞれ'84.6%, 100% と高い 陽性率が得られ、 TBLB は「肺野病変のある群」(44.4 %) よりなしろ「BHL のみ」の群で26例中16例、61.5 %と陽性率が高く、肺野型では5例中1例(20.0%)にと ジャつた。SNBはBHL+肺野、肺野型と病期が進行す るに従って、例数は少ないが、それぞれ8例中7例(87.5) %), 2例中2例(100%)と陽性率は高くなつたが, Kveim 反応は各群ともに50%以下の陽性率であり、 BHL 群以外での陽性率はいずれよ30%前後と低かつた。 BHL のみの例は いずれの 牛検方法でも相当程度診断が 可能であるが、 肺野病変のみみられる 進行期では SNB に高い陽性率を示した。しかし他の方法で診断ができな い場合や、臓器病変が疑われながら胸部所見に異常のな い症例では、縦隔鏡下でのリンパ節生検が最も有力な方 法と言える。

# (4) 新しい診断方法の試み—angiotensin converting enzyme とリゾチームについて

①血清 angiotensin converting enzyme (ACE と略) とリゾチーム活性: 血清 ACE 活性は Lieberman<sup>4)</sup> の 方法に準じ, 血清リゾチーム活性は Osserman<sup>5)</sup> らの方 法に従つて測定した。

成績は表10のごとくで、血清 ACE 活性の私どもの正常値は男性 40例で  $21.4\pm7.1$  unit、女性51例で  $20.3\pm7.2$  unit であつた。 サ症患者では、活動期サ症27例で  $45.6\pm13.1$  unit、非活動期サ症36例で  $20.0\pm7.1$  unit を示し、両者間に p<0.05 で有意差がみられた。 血清リゾチーム活性の私どもの正常値は、男性42例で $45.6\pm19.5\mu g/m l$  であつたが、26例の活動期サ症では  $75.2\pm17.1\mu g/m l$  であり、32例の非活動期サ症では  $44.9\pm18.0\mu g/m l$  で、この両者間では p<0.05 の有意差が認められた。

表 9 胸部 X線像と生検陽性率

		異常なし	肺門型	肺門+肺野型	肺野型
	Med. 93.0% 53	$84.6\% \frac{11}{13}$	94.7% 36 38	$100 \% \frac{4}{4}$	$100 \% \frac{2}{2}$
. 2	TBLB 47.8% 226	$16.7\% \frac{1}{6}$	$61.5\%  rac{16}{26}$	44.4%: 49	20.0% -1/5
	SNB 70.0% $\frac{42}{60}$	$40.0\% \frac{2}{5}$	$68.9\% \frac{31}{45}$	87.5% <del>7</del>	$100 \% \frac{2}{2}$
	Kveim 38.0% 46/121	$35.7\% \frac{5}{14}$	$40.2\% rac{35}{87}$	$30.8\% \frac{4}{13}$	$28.6\%\frac{2}{7}$

Med: 縦隔鏡下リンパ節生検 TBLB: 経気管支肺生検 SNB: 前斜角筋リンパ節生検

			ACE	リゾチーム			
		例数	unit	例数	$\mu_{ m g/m} l$		
対照	男	40	21.4±7.1	42	45.6±19.5		
刈炽	女	51	$20.3 \pm 7.2$	43	$46.2\pm17.1$		
11.45	活動期	27	45.6±13.1	26	75. 2±17. 1)		
サ症	非活動期	36	$20.0 \pm 7.1$ p<0.05	32	$\{44.9 \pm 18.0\}$ p<0.05		

**表 10** 血清 ACE およびリゾチーム活件

②病変改善前後の ACE とリゾチーム: BHL を有しているが、その後 BHL が消失または著明に縮小した14 症例について、初診時と最終観察時の ACE とリゾチーム値を比較した。

結果は図3に示すように、病変改善後に血清 ACE, リゾチーム両酵素活性がともに有意 (p<0.005) に低下 しており、経過の消長とよく一致する結果が得られた。 ③症例呈示

症例1(図 4) N.U. 26歳, 男性。

1976年11月限前霧視と視力低下が出現し,1977年1月 ocular sarcoidosis と診断された。胸部X線像でも BHL がみられた。3月からプレドニン 40 mg より治療を開始し、眼病変は消失、BHL も徐々に縮小した。胸部X線像所見の改善に伴い、ACE、リゾチームの両酵素活性も低下を示した。

症例 2 (図 5) T.S. 52歳, 女性。

1976年11月たまたま撮影した胸部 X線写真で両側に顆粒状陰影を指摘されて入院した。自覚症状なく,眼病変も認めなかつた。同年12月,開胸肺生検によりサ症と診断され,翌年1月よりプレドニン  $30\,\mathrm{mg}$  の治療を開始した。しかし肺野の陰影は不変で,ACE、y ゾチーム両酵素活性はいずれも大きな変動なく,ほぼ正常範囲を示している。

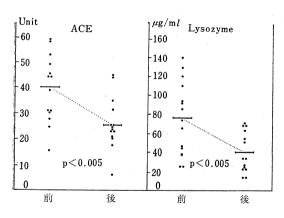
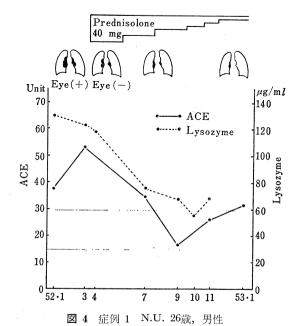
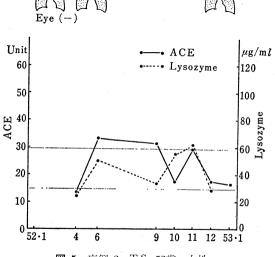


図 3 病変改善前後の推移





Prednisolone

図 5 症例 2 T.S. 52歳, 女性

## IV. 予 後

## (1) 胸部 X線像所見の経過(図 6)

予後を知る目的で、初診時と最終観察時の胸部X線像 所見を治療の有無と無関係に比較した。異常陰影が短期 間で消失したもの以外は、最低2年以上の経過観察の可 能であつた症例を対象とした。したがつて、最低2年か ら最高17年にわたる観察結果である。

自験例 167 例中経過不明のもの48例,初診からの経過 が 2 年未満のもの22例で,これらの70例を除外した97例 が対象となつた(図 6)。

① BHL のみの群: 67例中41例(61.2%)は BHL が消失したが,23例(34.3%)には BHL が残在し,2例(3.0%)には肺野陰影が加わり,1例(1.5%)は BHL が消失したが、途中出現した肺野陰影が残存している。

② BHL+肺野群: 10 例中 4 例は肺門, 肺野ともに消失し, 2 例は肺野陰影のみ消失, 3 例は BHL, 肺野と もに残存しており, 1 例は BHL のみが消失している。

③肺野群:経過中に BHL が出現した例はなく, 6 例中 2 例では肺野陰影が消失したが, 4 例には陰影が残存している。

④異常なし群:初診時から異常のみられない14例では, 経過中に肺門および肺野に陰影の出現したものは1例も ない。

初診時に異常があり、最終観察時に BHL 肺野ともに病変の消失したものを改善、何らかの陰影が残つているものを残存とすると、改善率は83例中47例、56.6%であつた。性別、眼病変の有無、発見動機別に改善率を比較すると表11のごとくで、男性では27例中17例(63.0%)、

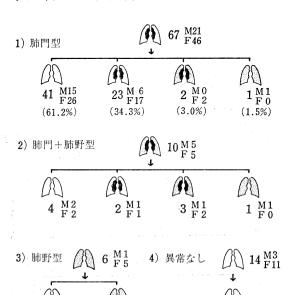


図 6 胸部 X線像所見の経過

表 11 改善率の比較

		改 善 47	残 存 36
男	27	17 (63.0%)	10 (37.0%)
女	56	30 (53.6%)	26 (46.4%)
眼 (+)	52	24 (46.2%)	28 (52.8%)
眼 (-)	28	21 (75.0%)	7 (25.0%)
検診発見	43	30 (69.8%)	13 (30.2%)
自覚症発見	40	17 (42.5%)	23 (57.5%)
平 均 年	齢	28.0歳	39.9歳

女性56例中30例(53.6%) が改善した。眼病変では、「眼病変あり」の52例中24例(46.2%)に対し、「なし」では28例中21例(75.0%)であつた。発見動機別では、検診発見例が43例中30例(69.8%)、自覚症発見例が40例中17例(42.5%)であり、改善例47例の平均年齢は28.0歳に対し、残存例36例のそれは39.9歳であつた。

## (2) 5年以上の病変残存例(表 12)

5年以上経過を観察し、この間、胸郭内病変が残存している症例を特に予後不良例とし、その因子を検討した。

対象は表 12 に示す 18例で、男性 4 例、女性 14例である。初診時の年齢は、10歳代 1 例、20歳代 1 例、30歳代 3 例、40歳代 5 例、50歳代 8 例で、平均年齢は44.4歳であった。発見動機は検診発見 7 例(38.9%)に対し、自覚症による発見が11例(61.1%)であり、眼病変の有無では16例(88.9%)が「あり」群で、眼病変のみられなかつたのはわずか 2 例のみであった。

#### (3) アンケートによる予後調査

患者の日常生活状況からみた 予後を, 表 13 のごとく 用紙を作製し,アンケート方法により調査した。進学,結婚,転勤などの理由で回収率は72例中57例(79.2%)であつた。男性20例,女性37例から得られた結果は以下のごとくであつた。

①日常生活:全く普通の生活が可能なもの43例(75.4%),無理をしなければよいが13例(22.8%),働けないが1例(1.8%)であつた。

②自覚症状: 57例中28例(49.1%)が何らかの症状を1つ, またはそれ以上有していた。自覚症状に程度の差はあるが、疲れやすいが13例と最も多く、以下、眼症状 6例、めまい 4 例、皮膚の紅斑 4 例、咳・痰 3 例であった。

③妊娠分娩との関係:本症に罹患後の分娩は8例に13件,自然流産は1例に1件みられた。胎児の異常としては1例に脳性小児麻脾があつた。しかし妊娠や分娩による自覚症状の悪化例はみられなかつた。

表 12 5年以上の病変残存例

	例年齢・性		70. E = 1 160	AL 1111 DI 122 TA	胸部 3	X 線 像	観察	備考
症 例	午酢	・性	発見動機	他臟器病変	初診時	最終時	年数	備考
1	48	女	全身倦怠感	眼	• BHL	BHL	17	完全右脚ブロック
2	57	女	関節痛,咳,皮疹	皮膚	・肺線維症	肺線維症	11.	不完全右脚ブロック
3	57	女	眼	眼	• BHL	BHL	10	甲状腺機能低下
4	38	女	検診	眼	• BHL	BHL	10	
5	53	女	咳,痰,微熱	眼,皮膚,骨	• BHL	BHL+肺	10	
6	54	女	尿崩症	神経,心,眼	• BHL	肺線維症	10	心病変で死亡
7	47	女	検診	骨	• BHL	BHL+肺	9	夫婦発症例
8	44	女	全身倦怠感,微熱	眼	BHL	BHL	8	
9	44	女	眼	眼,皮膚,表在リンパ	• BHL	BHL	7	心室性期外収縮
10	51	女	リンパ節腫脹	眼,表在リンパ	• BHL	BHL+肺	6	1.00
11	31	男	検診	眼,骨	• BHL	BHL	6	
12	16	男	検診	眼, 骨, 表在リンパ	BHL	BHL	6	
13	42	男	眼	眼,骨	·BHL+肺	BHL	6	
14	51	女	検診	表在リンパ	• BHL	肺 野	6	眼病変出現
15	56	男	眼	眼,表在リンパ	肺線維症	肺線維症	5	
16	50	女	検診	眼,皮膚,骨	·BHL+肺	BHL	5	
17	23	女	検診	眼,皮膚,表在リンパ	·BHL+肺	BHL+肺	5	
18	■ 37	女	眼	眼	• BHL	肺 野	5	

<sup>・</sup>ステロイド治療例

## 表 13 アンケート調査票

	該当には○印をつけて下さい。
1)	生活:働けない,無理をしなければよい,まったく普通
2)	仕事の内容:具体的に
3)	診察: うけている, うけていない, 入院中(病院名)
4)	咳,痰,息切れ,めまい,だるい,つかれ易い,目の異常, 皮膚の紅斑,結節,動悸,その他 何時頃
5)	胸部レ線 年に )回,とっている 病院名
6)	薬のんでいる、いない
7)	ッ反 昭和( )年( )月頃 陽性 陰性
8)	特に注意していること ある( ) なし
9)	大学で診察後の経過 よい, わるい, わからない
10)	妊娠
11)	改姓、転居先の住所をお知らせ下さい
12)	質問,その他ございましたら御記入下さい
	(必ず書いて下さい) 住所,氏名 ばらく診察をうけていない方は診察をおすすめします。

## 総括・考案

## I. 本症の実態

本症の発見率は、医師の認識度や診断技術によって差があり、かつ、この疾患自体が無自覚のまま経過する例が多いため患者数の正確な把握は困離であるが、サ研協の1977年までの集計では約5,000 例が登録されており、有病率は人口10万対5~6と推定されている6。一方、年次別発見患者数は、第1回の実態調査(1960年)で94例

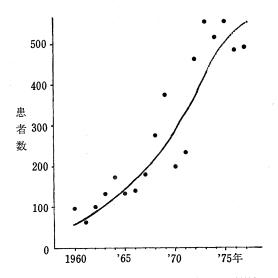


図 7 本邦の年次別発見患者数の推移(サ研協)

が集計されて以来、増加傾向がみられ60(図7)、最近の 5年間では年間500名近い患者が登録されている。自験 例では1962年から1971年ごろまで黒者数は漸増傾向にあ り、最近5年間の新患者数は年平均15.4人である。新潟 県下のサ症の実態調査については望月<sup>70</sup>の報告があり、 1966年までの11年間に45例が集計され、その間の年平均 患者数は 4.1 人であつた。諸外国の成績では、1963年の 国際会議で Löfgren<sup>8)</sup> によつて集計資料に基づいた罹患 状況の国際比較が試みられた。これによると, 有病率は 北に多く、南に少ない傾向がみられ、大半の国では10万 対10~20の有病率である。しかし胸部X線写真による集 検が世界各国で廃止される方向にある現在, 今後は国際 間の疫学を同一レベルで比較検討することは困難であろ う。一方、日本を除くアジア諸国の発生率は極めて低く, 細田<sup>9)</sup> ちの報告では、ほとんどの国で患者数は30症例に 満たない。

性・年齢別の分布は、自験例では図1、表14のごとく 男女比1:1.8と約2倍女性に多く、 $20\sim29$ 歳代に次いで50歳代に21.3%と高頻度にみられた。男性では $20\sim29$ 歳に54.2%と集中している。2,079例の全国集計 $^{10}$ では 男女比はほぼ1:1で、平2100 は男性1500例、女性1590例、<math>2100 は男性1040例、女性1040のを集計したが、性差はみられない。しかし女性は男性より胸部1000 に

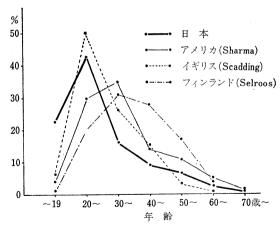


図 8 患者年齢分布の比較

会が少ないことから,実際は女性の方が多いと推定される。諸外国の報告では女性の割合が多く,例えばイギリス<sup>139</sup> 275例中 156例(56.7%),フィンランド<sup>140</sup> 140例中95例(67.9%)で,世界 4 都市の集計<sup>150</sup> でも 1,327例中女性が 759例(57.2%)である。またアメリカやフィンランドでは本邦例に比して40歳以上の年齢層にも広く分布している(図 8)<sup>120~14016</sup>。フィンランドでは30歳,40歳代にピークがあり,50歳代でも17%と高率で,人種や民族

	齢		自	自 験 例		本邦成績(1963~'72)			
年			総 計 167	男 59	女 108	総 計 2,079	男 991	女 1,088	
	~1	9 歳	24 (14. 4%)	6	8	465 (22. 4%)	251 (25. 3)	214 (19. 7)	
20	$\sim$	29	66 (39. 5)	32	34	899 (43. 2)	509 (51. 4)	390 (35. 8)	
30	~	39	19	6	13	331	144 (14. 5)	187 (17. 2)	
40	~	49	21	4	17	190	36 (3. 6)	154 (14. 2)	
50	~	59	27 (16. 2)	4	23 (21. 3)	133	32 (3. 2)	101 (9. 3)	
60	$\sim$	69	8	5	3	52	15	37	
70声	<b></b>		2	2	0	9	4	5	

表 14 年齡別,性別患者数

表 15 発見動機の比較

	サ 研 協100	泉17)	平 賀11)	自 験 例	チェコ スロバキア (Polansky) <sup>18)</sup>	ロンドン, ニュ ーヨーク,パリ, ロサンゼルス (Siltzbach) <sup>15)</sup>
総 集団検診 自 覚 症 そ の 他	2, 079 49. 7% 38. 4 11. 9	208 67 <i>%</i> 33	309 62. 8% 34. 6 2. 6	167 42.5% 53.9 3.6	125 31.2% 56.0 12.8	1, 327 32. 3% 67. 7

間の差がうかがわれる。

発見動機は、自検例では集検42.5%、自覚症による発見53.9%、偶然(その他)3.6%であつた(表 2)。本症は胸部X線検査で発見されることが多いため、集団検診の受診率により発見率も左右される。したがつて、集検が広く普及しているわが国ではそれによる発見率が高く、サ研協の集計10で49.7%、泉17は67%、平質110は62.8%の数字を示している(表15)。これに対し、近年X線集検の機会が減少しているチェコスロバキア180では31.2%、世界4都市の集計15つでは32.3%である。自験例では自覚症状発見が53.9%と集検発見を上回つており、医療事情を等しくする泉、平質らの成績と異なつているが、その理由として眼症状による発見が近年目立つて多いためである。

## II. 臨床像

胸部X線像所見は、縦隔を含めた肺門部病変と肺野病 変に分けて考えられる。今まで種々の分類が試みられて きたが、サ研協では X 線像所見を A. 肺門型、B. 肺門 肺野型, C. 肺野型, D. 肺線維症型に分けている。 Siltzbach ら150 も stage 0) 異常なし, stage 1) BHL, stage 2) BHL+肺, stage 3) 肺野型の4型に分け, stage 2) は stage 1) と 3) の中間の stage で, どちら かに変化しうる病変と定義している。表16に初診時の X線像所見を自験例と諸家の報告について比較した が15)19)20), わが国ではいわゆる BHL で発見されること が多いのに対し, 欧米では初診時すでに肺野病変が多い。 これは集検が主な発見動機になるわが国と、症状をもつ て受診し、発見される欧米との差によるものと思われ る。自験例では、初診時の胸部X線像で異常のない症例 の頻度が12%と他の報告より高く、殊に日本の統計であ るサ研協5.3%、泉1.9%のそれに比し高率であつた。肺 野のみの病型はわが国には少ないとされているが、自験 例では本邦の他の報告より高率である。これらの点は Mayock<sup>19)</sup>, Siltzbach ら<sup>15)</sup> の成績に近く, わが国でも将 来このような傾向になることが示唆される。

臨床検査成績では、ツ反の減弱、リンパ球数の減少、高  $\gamma$ -グロブリン血症、高 Ca 血症および尿症がみられる事実が古くから知られている。サ症患者でツ反減弱がみられることは  $Jadassohn^{21}$  が最初に記載し、以来、

この事実は確認されている。Nitter<sup>22)</sup> は本症が治癒すると再陽転すると報告したが、否定する成績<sup>23)</sup> もある。日本人の健康成人のツ反陽性率は80~90% (昭和43年全国結核実態調査) であるが、自験例では38.1%と低率で、全国集計例でも27%である。一方、細胞性免疫機能推定の一手段である DNCB テストがサ症患者で減弱を示す事実が Epstein<sup>24)</sup> らによつて最初に記載された。本反応の感作率は健康人で95%以上とされているが、自験例では58例中30例(51.7%)の陽性率であつた。この点についての報告は少ないが、本邦では北郷<sup>25)</sup>が30例中1例(3.3%) を報告し、Sharma ら<sup>26)</sup>は29%と報告している。Verrier Jones<sup>27)</sup> は活動期のサ症は感作されにくいと述べているが、自験例では病型や年齢とでは一定の傾向はみられず、ツ反との間にも相関性を認めなかつた。

#### III. 診 新

サ症は「原因不明の非乾酪性類上皮細胞肉芽腫を来す 疾患」との定義があり、生検は最も重要な診断方法であ る。しかし単に診断のみでなく、経過の把握、予後の推 定、更に原因不明の現在、病因追求の手掛りとしても大 切である。

生検部位の決定は患者の承諾を得たうえで全身状態, 年齢,性別を考慮して行なうが,原則的には疑わしい皮 膚変化や表在リンパ節の腫脹がある場合は,その部位を 第一選択としている。以下,主な生検とその成績を述べ る。

自験例には皮膚病変の疑われたものは25例あり、生検陽性率は23例中19例(82.6%)であつた。本邦での皮膚病変の頻度は2,079例中9.0%であるが、福代<sup>28)</sup>は典型的な皮疹を生検すれば100%典型的な類上皮肉芽腫を証明できると述べている。サ症の皮疹はステロイド剤によく反応し、短期間で消失するので初診時の入念な観察が大切である。

表在リンパ節生検は頸部リンパ節11例,ソ径部リンパ節2例,肘部リンパ節1例の計14例で,11例,78.6%の陽性率であつた。しかし患者がリンパ節の腫脹を自覚した例は2例のみであつた。

肝腫を認めた17例に腹腔鏡下の肝生検を行ない7例(41.2%)に肉芽腫がみられた。しかし肝機能検査では1例にアルカリフォスファターゼ52.5単位と高値をみた以

表 16 初診時胸部 X線像所見の比較

	サ 研 協 (全国集計)	Mayock et al.	Siltzbach et al.(集計)	泉	自 験 例
総 数 異 常 な し	1,572 5.3%	144 8%	1, 587 9. 8%	208 1.9%	167 $12.0%$
肺門のみ	62. 7	26	42.9	69. 2	70. 1
肺門+肺野	29. 7	51	41.6	25. 4	12.6
肺 野	2. 4	16	13. 7	3. 3	5. 4

外, 異常を示した例はなかつた。立花ら<sup>29)</sup> は肝機能上ほとんど異常のない症例で80%近い成績を得ており、Foti ら<sup>30)</sup> は75%の陽性率をあげ、肝生検は本症の有力な診断手技であると述べている。しかし肝病変は散布性であり、腹腔鏡下の生検が必要なため手軽に施行しがたい欠点がある。

視診あるいは触診上病変の存在が考えられない場合に SNB を行なつているが、60例中42例、70.0%に陽性所見を得た。諸家の報告でも、Lillington ら<sup>31)</sup> は80%、Haenselt ら<sup>32)</sup> は73%と陽性率は高い。この方法は外来患者でも施行でき、瘢痕も目立たない利点があり、自験例では肺野病変のみられる時期での陽性率は10例中9例(90%)と高率であつた(麦 9)。しかし胸部X線像に異常のない場合は40%と低く、陰性の場合でも本症を否定できず、更に縦隔鏡下の牛検を行なわねばならない。

縦隔鏡下のリンパ節生検は自験例では、57例中53例 (93.0%)の陽性率を得ている。胸部X線像所見の病期と 関係なく高い陽性率が得られ、殊に胸部X線像所見に異常がなく、眼病変でサ症が疑われた症例の診断法はこの 方法以外にない。 Carlens によつて開発されたこの方法 はほぼ100%の診断的中率が得られ<sup>330~350</sup>,安全かつ肉眼 的にリンパ節の性状や進展度を知ることができる利点が ある。また充分な組織材料が得られるため、診断は正確 で、電顕検索や細菌学的検査も可能である。しかしその 反面、全身麻酔下で行なう必要があり、手術瘢痕が目立 つために美容上の問題があり、特に本症の好発年齢が20 歳代の女性に多いことも対象患者が制限される場合があ る。

野沢ら<sup>36)</sup>の改良した方法で経気管支肺生検をサ症患者 46例に行ない,胸部 X線像所見上「異常なし群」6 例中 1 例(16.7%),「BHL のみ群」26例中16例(61.5%),「BHL +肺野群」9 例中 4 例(44.4%),「肺野群」5 例中 1 例(20%),全体で47.8%の陽性率が得られた(表 9)。この方法は気胸や血痰などの合併症も少なく<sup>37)38)</sup>,縦隔鏡やSNB などのように皮膚に瘢痕を作らず,何度も繰り返し施行できる利点がある。そのために経過や治療効果の判定に応用できるが,透視下で行なうのと,採取切片の

大きさに限界があるため、特異的所見の認められない場 合もある。Koerner ら39) はファイバースコープ下の肺 生検でサ症23例中21例(91.3%)の高率に肉芽腫を証明し ており、Tierstein ら40 も25例中20例(80,0%) の成績を 報告している。最近アメリカでは、診断のみの目的には この方法が縦隔鏡による生検に代わって用いられる傾向 にある41)。これらの報告はいずれも肺野陰影のみられる 病期により高い陽性率を得ているが、自験例ではなしろ 肺野陰影のない BHL のみの群で最も高い成績(61.5%) が得られた。現在ではサ症の初発部位は肺であろうとい う見解42)が定説となりつつあり、自験例では BHL のみ の症例を開胸肺生検の結果, 肺実質に多数のサ症肉芽腫 を認めた経験がある。Eule430 も胸部X線像上BHLのみ の38症例中37例に開胸肺生検で肉芽腫を証明している。 自験例で BHL のみの群で最も高い陽性率が得られたこ とは、発症初期の BHL の時期にすでに肺に肉芽腫の存 在することを示しているが、これは前述の開胸肺生検の 成績と一致している。一方、自験例には肺野に粒状影が みられ,数回にわたつて本法を行なつたが診断が得られ ず、開胸肺生検により本症とされた2症例があるが、結 節が大きいため鉗子でつかみきれなかつたのではないか と考えている。

ACE は肺の代謝と密接な関係があると考えられており、サ症患者血清の ACE 活性の有意の上昇が明らかになり、本症の診断や治療効果判定に有力な所見であるとされている $^{44)$ ~ $^{46}$ °。本症で ACE が上昇する機序や病態生理は未だ不明であるが、Lieberman $^{47}$ 、Silversteinら $^{44}$ は活動性サ症患者の生検リンパ節の ACE 活性は正常者のそれに比し有意に上昇していることから、本酵素活性の起源をリンパ節と推測しており、上田ら $^{48)}$ もサ症患者リンパ節の本酵素活性と血清中のそれは正の相関関係を示すことから、リンパ節由来と述べている。自験例の測定値は正常値  $20.9\pm7.1$  unit、活動期サ症  $45.6\pm13.1$  unit、非活動期サ症  $20.0\pm7.1$  unit で、活動期と非活動期の間に有意差がみられた。また BHL を示した14例について胸部X線像所見が改善する前後で活性値を比較したが、初診時  $40.1\pm12.9$  unit、改善時  $26.5\pm$ 

表	17	報告者別	ACE	活性値
---	----	------	-----	-----

		正 常 値		活動期サルコイドージス		
		測定值 (unit)	症例数	測定值 (unit)	症例数	
Lieberman	(1976)	22.8±6	172	$47.3 \pm 22$	64	
Silverstein	(1976)	$28.6 \pm 0.9$	63	$48.3 \pm 4.8$	58	
Fanburg	(1976)	28.2±11.3	84	$52.7 \pm 25.4$	56	
上田ら	(1976)	$15.0\pm0.9$	18	$38.2 \pm 2.3$	17	
四元ら	(1978)	$18.9 \pm 4.8$	20	$36.3 \pm 11.5$	83	
自 験 例		$20.9 \pm 7.1$	91	52. $7 \pm 25$ . 4	56	

10.5 unit と、改善後に有意(p<0.005)に低下する成績が得られた。しかし ACE 活性値はほぼ同様の測定方法にもかかわらず,用いる試薬の buffer や pH の差によつて正常値が多少異なつており⁴40~⁴77⁴97 (表17),同一検体を測定した結果でも,測定者によつて成績に若干差がみられる500 ために,他の施設の値をそのまま比較することはできない。しかし,いずれにしても活動期サ症で本酵素活性が有意に上昇することは事実であり,本症の診断,経過追跡の面で有用である。血清 ACE 活性とリゾチーム活性の相関関係については,自験例では 1) BHLのみ,2) BHL+他臓器病変,3) BHL(一) または眼病変のみの3 群について比較検討した結果,BHL+他臓器病変の群だけに相関がみられた510。Silverstein ら520はサ症患者の血清および生検リンパ節中の両酵素活性を比較し,いずれにも相関がみられたと報告している。

## IV. 予 後

胸部X線像上の異常所見の消失率について諸家の報告を比較し、表 18 に示した<sup>15)53)54)</sup>。 自験例は 最短 2 年以上経過観察した症例の初診時と最終観察時を比較し(図6),BHL のみの群61.2%,BHL+肺野群40%,肺野群33.3%の消失率をみた。肺野のみの 6 例中 2 例は消失したが,残存の 4 例中 3 例は初診時から肺線維症を示した症例であつた。欧米の報告でも BHL のみの消失率はよいが,初診時から肺野型を示す症例頻度の高いことが目立ち,この型の消失率は報告者でかなり差がみられる。小須田ら<sup>55)</sup>は異常陰影の消長を累積消失率で検討し,それによると BHL,肺野陰影とも 2 年以内にそれぞれ 75%,67%が消失し,5 年目では82%,74%なので,異常所見の消失はほとんどが 2 年以内であり,それ以後の消失率は極めて少ないと述べている。

大部分のサ症病変は一般に2年以内に消失することから、2年以内にサ症の全病変が消失し、以後再発をみない場合は予後良好、2年以上病変が残存する場合は不良と考えられている555560。予後を左右する因子について本邦ではこれまでにも報告がなされているが550-580、予後不

良因子は女性、年齢40歳以上、肺野病変あり、眼病変あり、の4項目があげられ、逆に予後良好因子として年齢29歳以下、検診発見、眼病変なしなどである。自験例でもこれらの点では図6、表11にみるごとく、改善例は男性63.0%に対し女性53.6%、眼病変あり46.2%に対し眼病変なし75.0%、検診発見69.8%に対し自覚症発見42.5%、また改善例の平均年齢28.0歳、残存例のそれは39.9%であつた。しかし、急性発症例の予後に関しては全国集計例では必ずしも良好でないのに対し、自験例では極めて良好であつた。急性発症例の詳細は第2報で述べる

サ症は自然治癒率が高く、予後良好な疾患とされているが、なかには不幸な転帰をとる場合もある。自験例では167例中2例が死亡しているが、1例はサ症による尿崩症、肺線維症で経過観察中に心病変が原因で急死したもので、目下剖検所見を検討中である。他の1例はサ症が直接の死因ではなく、免疫抑制剤による顆粒球減少がみられ、肺炎を併発して死亡したものである。全国集計590では本症の死亡率は平均観察期間5.5年で3.2%である。岩井ら600の剖検57例の成績では、生前サ症と診断されていたのは13例(22.8%)にすぎず、直接サ症が死因となつたのは41例(71.9%)で、その他の死因は脳出血、原発性肺高血圧症、胃潰瘍の出血などである。

予後判定の基準として患者の日常生活からの評価がなされるが、自験例についてこの点をアンケート方法(表13)により調査した。対象57例中「まつたく普通の生活が可能」43例(75.4%)、「無理をしなければよい」13例(22.8%)、「働けない」1例(1.8%)の回答が得られた。平素、自覚する症状は疲れやすい13例、眼症状6例、めまい4例、皮膚紅斑4例、咳・痰3例であつた。一方、自覚症状があつても日常生活に何ら支障を感じていない例も多く、働けないと回答した例は「疲れやすい」がその理由であつたが、これは直接サ症のためというよりも開胸術後の胸膜癒着が原因と考えられる。しかしこの調査の結果、すべてがサ症によるものではないにしても、何

	24	D1112113 114	The TT MAKEN	1132			
	BHL のみ		BHL+肺野		肺 野		観察期間
	観察例数	消失率	観察例数	消失率	観察例数	消失率	既宗规问
自 験 例	67	61.2%	10	40%	6	33.3%	2 年間
サ 研 協	59	61.0	88	53.4	8	0	平均5.1年
三上、細田ら	144	35	84	24	18	0	}
James, Neville (ロンドン)	243	75	129	54	80	26	
Siltzbach $(= = - = - )$	133	54	108	31	44	10	平均2.5年
Turiaf (ペリ)	123	87	162	74	24	0	
Sharma (ロサンゼルス)	38	53	52	49	50	27	
Scadding (イギリス)	32	84. 3	40	59. 5	60	25. 0	5年間

表 18 初診時胸部 X線像と消失率

らかの自覚症状を有している患者が予想以上に多数であった点、更に患者が予後や、ステロイド剤の副作用に対する不安感を抱いている点などが明らかになり、なお一層細心の注意を払つて患者指導、経過観察の必要があると考えている。全国例についての同様の調査結果<sup>55)</sup>では、生活に不自由を感じているものは 528例中 60例(11.4%)で、女性に多く、眼症状30例(50%)、呼吸困難16例(26.7%)が主な理由であつた。

本症は妊娠可能な年齢層に好発するので、妊娠分娩と の関係は重要な問題である。自験例のアンケート調査結 果では、罹患後の分娩は8例に13件で、いずれも正常分 娩であり、自然流産は1例に1件みられたが、妊娠分娩 による自覚症状の悪化例はみられなかつた。妊娠, 分娩 が本症に及ぼす影響についての報告も多いが、大部分は 少数例の報告で、系統的な検討、解析は少ない。 細田 ら61)は22例26件の妊娠で妊娠中に改善例が多く、分娩後 に悪化例が増す傾向がみられ、悪化例の大部分は眼病変 を伴つていたと述べている。O'Leary62) は28例で妊娠 中の改善 5 例 (17.9%), 不変 22 例 (78.6%), 悪化 1 例 (3.6%) に対し、分娩後の改善8例(28.6%)、不変16例 (57.1%), 悪化4例(14.3%)で, サ症の経過に影響なし と報告している。私どもはサ症発症後の3年間と、ステ ロイド治療中の妊娠はできるだけ控えるように指導して おり、また分娩後の病態のチェックに特に注意を払つて いる。

#### 結 論

1962年から1978年12月までの17年間に受診したサ症患者 167 例について本症の実態、臨床像、診断、予後を検討し、また本邦および欧米の成績と比較して自験例の特徴について述べた。

- 1) 167例は組織診断137例, 臨床診断30例で, 男性59 例, 女性 108 例と女性が多く, 年齢分布は男性は20歳代に, 女性では20歳代と50歳代にそれぞれピークがみられた。
- 2) 発見動機は,検診発見71例(42.5%)に対し自覚症 状による発見が90例(53.9%)で,自覚症状の中で特に眼症状による発見が52例(31.1%)にものぼつた。
- 3) 胸部 X線像の異常所見は 139例 (82.6%) が BHL を示し, 他方, 全く異常を認めない例が20例(12.0%), 肺野病変のみを示した例も 9 例(5.4%) みられた。
- 4) 各種生検方法の成績を示し、胸部X線像上の病期別の陽生率を比較した。その結果、BHLの時期にはいずれの方法でも高い陽性率が得られるが、BHLを認めない場合には縦隔鏡による生検が最も信頼性が高い。
- 5) 血清 ACE 活性値は正常人  $20.9\pm7.1$  unit, 非活動期サ症  $20.0\pm7.1$  unit に対し,活動期サ症  $46.5\pm13.1$  unit と活動期で有意に高値を示した。BHL を示

した14例では、初診時  $40.1\pm12.9$  unit に対し BHL 消失時  $26.5\pm10.5$  unit と有意に低下を示し、胸部X線像の経過と密接な関連が認められた。

- 6) 2年以上経過観察した97例の胸部病変の改善率と5年以上病変の残存した18例から,予後に影響する因子を検討し,年齢28歳以下,男性,眼病変なし,BHLのみの検診発見例などが予後良好を期待できる因子であつた。
- 7) アンケート方式による日常生活状況からみた予後 調査を57例に行ない、全く普通の生活が可能なものが43 例(75.4%)であつたが、反面28例(49.1%)は疲れやすい、 眼症状、めまいなどの自覚症状を有していた。
- 8) 本邦の諸家の成績と対比した結果,自験例では女性の頻度が約2倍高く,自覚症状発見例が多く,肺野病変の比率が高い点が特徴で,欧米の報告に近似した成績であつた。

稿を終わるにあたり,ご指導とご校閲を賜わりました 木下康民教授,直接ご指導ご教示頂いた伊藤慶夫講師に 深謝致します。またご協力を頂いた第2内科呼吸器班の 諸先生,本学眼科学教室の諸先生に厚くお礼申し上げま す。

## 文 献

- Hutchinson, J.: Illustrations of Clinical Surgery, London, p. 42, 1898.
- 2) Schaumann, J.: Brit. J. Dermat., 36: 515, 1924.
- 3) 竹谷実: 皮泌誌, 21:943, 1921.
- Lieberman, J.: Amer. Rev. Resp. Dis., 109:743, 1974.
- 5) Osserman, E. F.: J. Exp. Med., 124: 921, 1966.
- 6) 小高稔: 日本サルコイドージス研究協議会ワークショップ,1979年2月,東京.
- 7) 望月博之: 新潟医学会誌, 82:518, 1968.
- 8) Löfgren, S.: Proceedings of III rd International Conference on Sarcoidosis, 1963.
- Hosoda, Y., Kosuda, T. et al.: Ann. N.Y. Acad. Sci., 378: 347, 1976.
- 10) Hosoda, Y., Kosuda, T. et al.: Ann. N.Y. Acad. Sci., 378: 355, 1976.
- 11) 平賀洋明: サルコイドージス図説,富士プリント (株),札幌,p.32,1978.
- 12) 泉孝英: サルコイドージスの臨床―その周辺と鑑別, 金芳堂, 東京, p. 107, 1975.
- Scadding, J.D.: Sarcoidosis Eyre & Spottiswoode, London, p. 52, 1967.
- 14) Selroos, O.: Acta Med. Scand., 503:9, 1969.
- 15) Siltzbach, L.E., James, D. G., Nevil, E. et al.: Am. J. Med., 57:847, 1974.
- Sharma, O. P.: Sarcoidosis—A Clinical Approach, Thomas, USA, p. 8, 1975.
- 17) 泉孝英: サルコイドージスの臨床―その周辺と鑑別, 金芳堂, 東京, p. 127, 1975.
- 18) Polansky, F. and Stastny, B.: Proceeding of Vth

- Int'l. Conf. on Sarcoidosis, 1971
- 19) Mayock, R. L., Bertrand, P. et al.: Am. J. Med., 35: 67, 1963.
- 20) 泉孝英, サルコイドージスの臨床―その周辺と鑑別, 金芳堂、東京, p. 149, 1975.
- 21) Jadassohn, J.: Arch. Dermatologie, 119:10, 1914.
- 22) Nitter, L.: Acta Radiol., Suppl. 105:1, 1953.
- 23) Israel, H. L. and Sones, M.: New Engl. J. Med., 273: 1003, 1965.
- 24) Epstein, W. L. and Mayock, R. L.: Proc. Soc. Exp. Biol., 96: 786, 1957.
- 25) 北郷修: 臨床免疫, 5:61,1973.
- 26) Sharma, O. P., James, D. G. and Fox, R. A.: Chest, 60: 35, 1971.
- 27) Verrier Jones, J.: Clin. Exp. Immunol., 2:477, 1967
- 28) 福代良一: サルコイドージス臨床皮膚科全書第5巻, 金原出版,東京,p. 224, 1969.
- 29) 立花暉夫: サルコイドージス, 日本サルコイドージス研究協議会編, 東京大学出版会, 東京, p. 154, 1979
- 30) Foti, P. R. and Moser, K. M.: Amer. Rev. Resp. Dis., 99: 610, 1969.
- Lillington, G. A. and Jamplis, R. W.: Ann. Intern. Med., 59: 101, 1965.
- 32) Haenselt, V.: Z. Tuberk., 122: 290, 1964.
- Carlens, E.: Ann. Otal. Rhinol. Laryngel., 74: 1102, 1965.
- 34) Beckert, W. and Kander, H.: Z. Erkr. Atmungsorgane, 131: 185, 1970.
- Greschuchna, D. et al.: Mediastinoscopy 79
   Odense University Press, 1971.
- 36) 野沢幸男他10: 日胸疾会誌, 12:191, 1976.
- 37) Herf, S. M., Suratt, P. M. and Arora, N. S.: Amer. Rev. Resp. Dis., 115: 708, 1977.
- 38) 近藤有好・野沢幸男: 経気管支肺生検呼吸器疾患最近の進歩一あすへの内科展望, 金原出版, 東京, p. 44, 1978.
- Koerner, S. K., Sakowitz, A. J., et al.: N. Eng. J. Med., 293: 268, 1975.
- 40) Tierstein, A. S. et al.: Ann. N.Y. Acad. Sci., 278: 522, 1976.

- Tierstein, A. S. et al.: VIIIth Int'l. Conf. on Sarcoidosis, 1978.
- 42) Iwai, K. and Oka, H.: Amer. Rev. Resp. Dis., 90:612, 1964.
- 43) Eule, H.: Vth Int'l. Conf. on Sarcoidosis, 1969.
- 44) Silverstein, E., Friedland, J. and Lyons, H. A.: Ann. N.Y. Acad. Sci., 278: 498, 1976.
- Fanburg, B. L., Schoenberger et al.: Amer. Rev. Resp. Dis., 114: 525, 1976.
- 46) 上田英之助・西村一孝他: 日 胸疾会誌, 14:736, 1976.
- 47) Lieberman, J.: Ann. N.Y. Acad. Sci., 278: 488, 1976.
- 48) 上田英之助・西村一孝他: 日胸疾患会誌, 16:94, 1978
- 49) 四元秀毅・北村論: 日本臨床, 36 (春季増刊号): 1896, 1979.
- 50) 橋本勉・横山英明他: 厚生省特定疾患サルコイドー ジス調査研究班、昭和54年度総会発表。
- 51) 森川聡・平野徹他: 第18回胸部疾患学会総会示説発表, 1978.
- 52) Silverstein, E., Friedland, J. and Ackerman, T.: Am. J. Clin. Pathol., 68: 219, 1977.
- 53) サルコイドージス研究協議会(三上理一郎): 第7回 日本胸部疾患学会総会特別報告配布資料, 1967.
- 54) Scadding, J. D.: Brit. Med. J., II (5261): 1165, 1961.
- 55) 小須田達夫他: 内科, 40:978,1977.
- 56) 細田裕・長田浩他: 肺と心, 18:46, 1971.
- 57) 藤井皓・山本正彦他: 最新医学、7:1392、1972.
- 58) 山本正彦: サルコイドージス, 日本サルコイドージス研究協議会編, 東京大学出版会, 東京, p. 465, 1079
- 59) 厚生省特定疾患サルコイドージス調査研究班: 昭和 48年度厚生省特定疾患サルコイドージス調査研究班 研究業績, p. 369, 1974.
- 60) 岩井和郎・立花暉夫・松井泰夫他: 日胸疾会誌, 11:749, 1973.
- 61) 細田裕・泉孝英他: 日胸, 30:305, 1971.
- 62) O'Leary, J. A.: Am. J. Obst and Gynec., 84: 462, 1962.